第15回 専門新聞写真コンクール

平成17年度

入選・特別賞・秀作19点決まる

社団法人 日本専門新聞協会が第五八回新聞週間にちなんで協会加盟社の社員及び一般読者を対象に募集していた「第一五回専門新聞写真コンクール」の入選作品が決定。一〇月一八日の日本専門新聞大会フェスティバルにおいて表彰式が行われる。

今回は昨年の倍増近い九五五点の応募があり、これら作品を対象に九月八日、東京・虎ノ門の同協会会議室で審査委員会が開かれ、文部科学大臣賞など一九点の入選作・特別賞・秀作が決まった。

昨年までの文部科学大臣奨励賞は、今回から文部科学大臣賞に昇格。また新たに審査委員特別賞が設けられた。

審査委員は、日本写真家協会名誉会員の芳賀日出男氏（審査委員長）をはじめ、同協会会員の江成常夫氏、関口照生氏の三氏。慎重審査の結果、文部科学大臣賞は小澤啓さん、理事賞は五十嵐一浩さん、審査委員長賞は佐藤義敏さんがそれぞれ入選、また特別賞二点、秀作一四点も決まった。

【入選者は別掲のとおり】

文部科学大臣賞

「糸魚川けんか祭り」（組写真）

小澤　啓（日本金融通信社）

審査講評

審査委員長
芳賀日出男 氏

平成一七年度、第一五回専門新聞写真コンクールの応募作品は九五五点であった。昨年の五三四点の倍近く増えたことを、まず喜びたい。デジタルカメラの撮影に多くの応募者が習得されてきたことを第一の理由にあげられよう。また各社の読者の方々の熱心な応募により入賞入選者のあったことも報告したい。

応募作品の質は一段と向上した。審査委員会では応募の作品の点数も増えたことにより今回からは審査委員長賞のほかに審査委員特別賞二点を増やして、表彰することになった。これにより入賞入選作品は合計一九点となった。

審査委員は今まで通り、江成常夫、関口照生、私の三名で、厳正に審査を行った。

文部科学大臣賞は、「糸魚川けんか祭り」小澤啓氏（日本金融通信社）の作品で、三枚組写真の労作である。祭りの写真を記録した的確さとあわせて、画面にあふれる迫力を表現している点で、三審査委員が一致して推薦した。

日本専門新聞協会理事長賞の「大雪で土砂崩落」五十嵐一浩氏（福島建設工業新聞社）はすぐれた新聞報道写真であり、豪雪中の撮影の苦労がにじみ出ている。

審査委員長賞は「補欠選手」佐藤義敏氏（環境新聞社読者）の作品。高校野球選手補欠員の裏面を見事な画面構成で写しこんでいる。

審査委員特別賞二点は「てれる」蜷川謙一氏（塗料報知新聞社読者）、東京三社祭の雰囲気のなかで子ども三人の表情をたくみにまとめた作品。「お兄ちゃん、何やっているの？」岡野晃也氏（日本工業経済新聞社）の幼い兄弟のごく自然な語らいの中に、愛情の感じられる作品である。

秀作は一四点を選出した。いずれも九五五点応募の作品のなかでは傑出しており、来年は是非高位入賞を得てほしい力量の作品であった。なお、この中にも読者の作品が二点あり、いかに読者が専門新聞を熱心に読んでおられるのかを審査員一同はよく知った次第である。

（日本写真家協会名誉会員）

作品の質は一段と向上

審査委員特別賞を新設

審査委員
関口　照生 氏

応募総数九五五点という数は、一五回総ての審査にたずさわって来たものにとって嬉しいかぎりであった。それに内容もよかった。賞にもれた作品も入賞作品と紙一重と言ってもよかった。

しかし受賞者の作品には、必ず見る者を感動させる要素の幾つか、例えば「躍動している」「表情がある」「力がある」「視点がしっかりしている」等々がその作品に込められている。

デジタルカメラが一般化し「写る」ということが当り前になった、今、「はっきりとしたテーマ」や「撮りたいもの」をしっかり自分自身で持つことが重要になって来た。

同時に被写体に対し漠然とカメラを向けるのではなく、自身の「視点」を持つ訓練をすることをお勧めする。

今後は「写った」写真ではなく「撮つす」というという意図を持って作品を作ってほしいと思います。

（日本写真家協会会員）

審査委員
江成　常夫 氏

新聞写真はデジタル化した、と言っても過言ではないだろう。メディアとしての写真にとってデジタルが優れているのは、リアルタイムで送稿できる速報性と、銀塩写真に比べ撮影案件の優位性にある。

それを反映し、今回の応募作も圧倒的にデジタル作品が多かった。

作品が大型化し、文部科学大臣賞を獲得した小澤啓さんの「糸魚川けんか祭り」にもデジタルの力が如実に現われている。

このコンクールも一五回を重ね質量ともに向上してきたが、今回の総評として指摘するとすれば祭りや美しい風景、表層的な目に流れがちで、社会と時代への視点が総じて弱く、日常生活の現実を鋭く切り取った作品がもっと欲しかった。時評とメッセージ性こそが、新聞写真の原点だからである。

（日本写真家協会会員・九州産業大学大学院教授）

審査委員長賞

『補欠選手』

佐藤　義敏（読者：環境新聞社）

日本専門新聞協会理事長賞

『大雪で土砂崩落（ＪＲ只見線）』

五十嵐一浩（福島建設工業新聞社）

審査委員特別賞

『お兄ちゃん、何やってるの？』

岡野　晃也（日本工業経済新聞社）

審査委員特別賞

『てれる』

蜷川　謙一（読者：塗料報知新聞社）

入選者のことば

文部科学大臣賞

小澤　啓（日本金融通信社）

受賞できるとは微塵も思っていませんでした。仕事でカメラを持つようになったため撮影歴は一年半。技術は下素人です。

そもそもコンクール出展など全く考えていなかったため、お祭りの躍動感に心を躍らせながら無心で撮影したのが良かったのだろうと分析しています。

糸魚川けんかまつりと会社の先輩方の技術指導、同僚、プリント屋さん、カメラの性能の高さのおかげで作品は成ましました。

協会理事長賞

五十嵐一浩（福島建設工業新聞社）

日本写真家協会の先生方に審査、評価いただき、理事長賞を受け本当に嬉しく、関係皆様に御礼申し上げます。

現代はカメラ付携帯電話やコンパクトカメラの普及で、だれもが容易にシャッターを切るチャンスがあり、ニュース写真に登場しています。

だからこそ職業人としての意志をふめ、しっかりした構図の撮影が重要だと改めて感じます。

今後も産業界と社会の両方に軸足を置き、有効な情報、写真を通して日々、仕事にあたります。

審査委員長賞

佐藤　義敏（読者・環境新聞社）

昨年の理事長賞に続き今年は審査委員長賞に全く驚いています。

この写真は、息子が高校で野球部に在籍していたときの作品です。三年の夏には、最後の大会であったため、妻と開会式の観戦に出かけました。

晴れ姿のピッチャー選手の影にこの選手を支えた多くの補欠選手がいることを忘れてはなりません。

入場行進をウクワクした気持ちで待つ選手、その後ろに何かわびしさを感じました。入場者の中には息子の姿はなかったが、精一杯の叫びが聞こえるようだった。

審査委員特別賞

岡野　晃也（日本工業経済新聞社）

この度は、審査員特別賞という栄誉を賜り、感謝申し上げます。

この写真は、普段から撮っている二人の息子の普通の生活からの一枚です。朝、起きてきた長男（六歳）が、携帯電話をいじっているところに、次男（一歳）が「なんだろう、楽しいことやってるのかな」と覗きもうとしている場面です。仲の良い二人の一コマが写せたかなと思います。

今回の受賞は、二人の成長と一つの思い出にもなったと、感謝申し上げる次第です。ありがとうございました。

審査委員特別賞

蜷川　謙一（読者・塗料報知新聞社）

この度は「審査委員特別賞」を賜りありがとうございました。

この写真を撮った時、浅草の街は三社祭で活気にあふれていました。

撮影会に参加し、下町らしい雰囲気を求めて歩き廻ったところ、のれんの間から可愛らしい女の子が、はずかしそうにこのだいるのに気がつき、シャッターを切りました。

作品はこれまで謎のままでいただいた喜びは何にも代えられない思いで一杯です。

重ねて御礼申し上げます。

平成17年度（第15回）専門新聞写真コンクール　（敬称略）

賞名	作品名	氏名	備考
文部科学大臣賞	糸魚川けんか祭り（組写真）	小澤　啓	日本金融通信社
日本専門新聞協会理事長賞	大雪で土砂崩落（ＪＲ只見線）	五十嵐一浩	福島建設工業新聞社
審査委員長賞	補欠選手	佐藤　義敏	読者（環境新聞社）
審査委員特別賞	お兄ちゃん、何やってるの？	岡野　晃也	日本工業経済新聞社
審査委員特別賞	てれる	蜷川　謙一	読者（塗料報知新聞社）
秀作	自然と共に	岸田　義典	新農林社
秀作	市場（組写真）	江口　英一	観光経済新聞社
秀作	光輝遥花（組写真）	山村　俊郎	産業新聞社
秀作	天を突き夜空に躍る立佞武多	嶋川　龍雄	読者（日本教育新聞社）
秀作	ヒーロー参上！	大谷　勝男	日本工業経済新聞社
秀作	お盆の幻夜	八島　福夫	福島建設工業新聞社
秀作	運動会、応援合戦の一場面	宮田　信夫	日本教育新聞社
秀作	防災ヘリで救助訓練	斎藤　直樹	福島建設工業新聞社
秀作	ワニ！	黒川　宣則	日本工業経済新聞社
秀作	異形の風景	小島　輝夫	読者（塗料報知新聞社）
秀作	Ride is Life Life is Ride	齋藤　和明	税経
秀作	妙見の崩落現場	近藤　和也	日本工業経済新聞社
秀作	お盆の葉タバコ収穫	大内　隆顕	新農林社
秀作	初めての川遊び 気持ちいい！	城田　徹	建通新聞社
秀作	八甲田トンネル 折紙工区	佐藤　一彦	建設新聞社
招待作品	精霊流し	勝又　時彦	東京交通新聞社
招待作品	おお！ これは極楽	房木　芳雄	日本教育新聞社